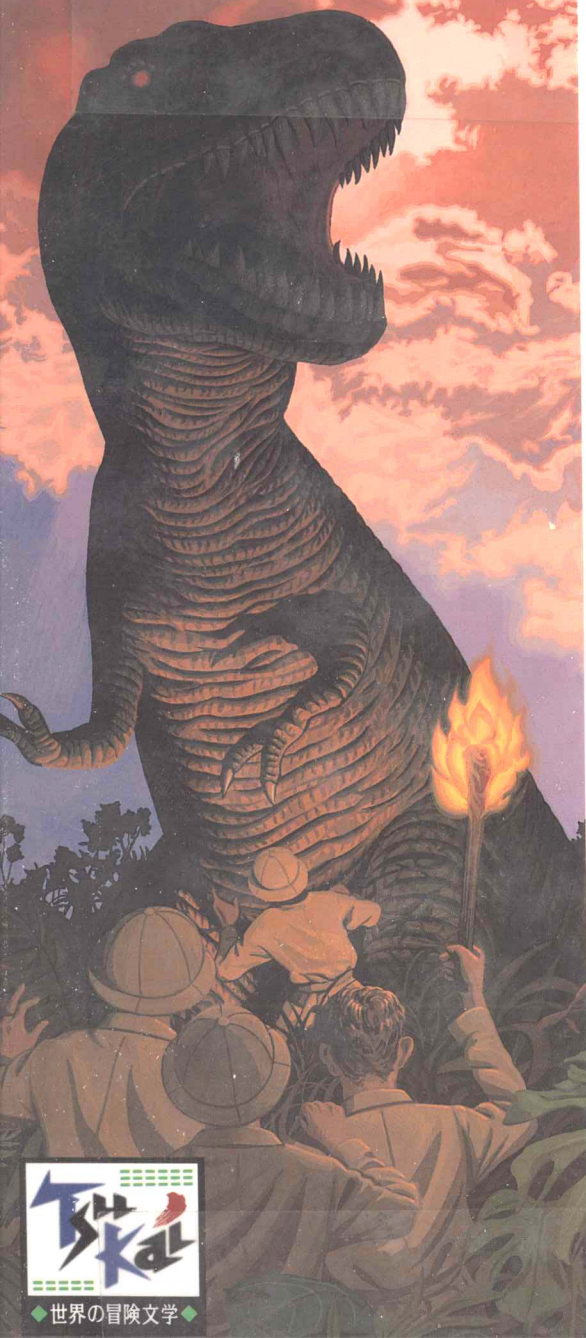


# 失われた世界

森詠文

原作・C・ドイル

絵・影山徹



◆ 世界の冒険文学 ◆

---

もり えい  
**森 詠** 原作 アーサー・コナン・ドイル 933

痛快 世界の冒険文学 ⑬

## 失われた世界

うしなわれたせかい 20cm 334P

---

定価は、カバーに表示してあります。

1998年10月20日 第1刷発行

2000年9月28日 第4刷発行

筆 者 森 詠

画 家 影山 徹

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21(〒112-8001)

電話 出版部 03(5395)3535

販売部 03(5395)3625

製作部 03(5395)3615



印刷所 図書印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

---

©Ei Mori 1998 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取り替えします。なお、この本についての問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

図<日本複写権センター委託出版物>本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-268013-0 (児一)

---

# 失われた世界

うしなわれたせかい

---

もくじ

## 目次



1 とにかく冒険<sup>ぼうけん</sup> ..... 9

2 恐竜<sup>きょうりゅう</sup>が生きている？ ..... 20

3 探検隊<sup>たんけんたい</sup>をだそう ..... 34

4 未知<sup>みち</sup>への船出<sup>ふなで</sup> ..... 44

5 探検<sup>たんけん</sup>の準備<sup>じゅんび</sup>はととのった ..... 53

6 奥地<sup>おくち</sup>へ出発<sup>しゅつぱつ</sup> ..... 61

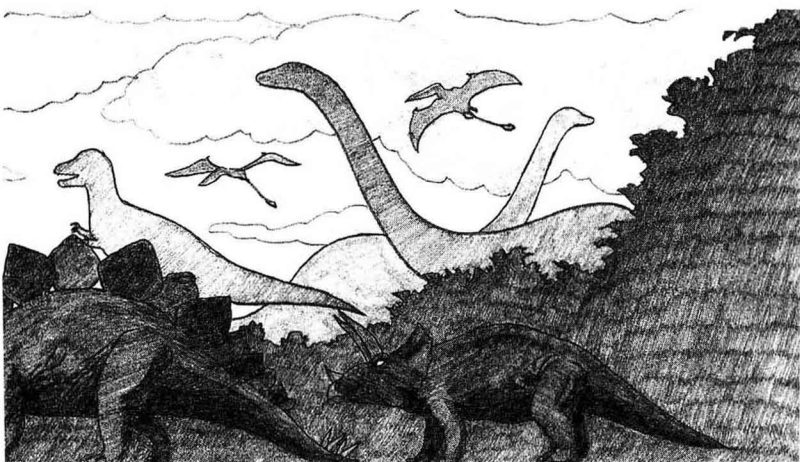
7 インディオ村<sup>むら</sup>につく ..... 67

8 ボアだあ ..... 75

9 毒<sup>どく</sup>ぐもがいた ..... 82



|                                   |                                    |                                   |                                   |                                     |                                        |           |                                  |                                |
|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|----------------------------------------|-----------|----------------------------------|--------------------------------|
| 18                                | 17                                 | 16                                | 15                                | 14                                  | 13                                     | 12        | 11                               | 10                             |
| 原始人出現<br><small>げんしじんしゅげん</small> | 恐竜来襲<br><small>きょうりゆうらいしゅう</small> | 翼竜の大群<br><small>よくりゆうたいぐん</small> | 恐竜がいた<br><small>きょうりゆうがいた</small> | えんぴつ山に登れ<br><small>えんぴつやまのぼ</small> | 竹林の白骨死体<br><small>たけばやしはつこししたい</small> | クルピーラがでた！ | ゴメスの反乱<br><small>ごめすはんらん</small> | 戦いの太鼓<br><small>たたかたいこ</small> |
| .....                             | .....                              | .....                             | .....                             | .....                               | .....                                  | .....     | .....                            | .....                          |
| 163                               | 154                                | 149                               | 142                               | 132                                 | 125                                    | 116       | 105                              | 94                             |



27

猿人再来襲？  
えんじんさいらいしゅう

258

26

恐竜との決戦  
きょうりゅうとのけつせん

248

25

人質解放か戦争か  
ひとじちかいほう せんそうか

234

24

岩石が落ちてくる  
がんせきがおちてくる

228

23

猿人との戦争勃発  
えんじんとせんそうぼつぱつ

217

22

台地人の村へ  
だいちじんのむらへ

208

21

中央湖をいく  
ちゅうおううみをいく

200

20

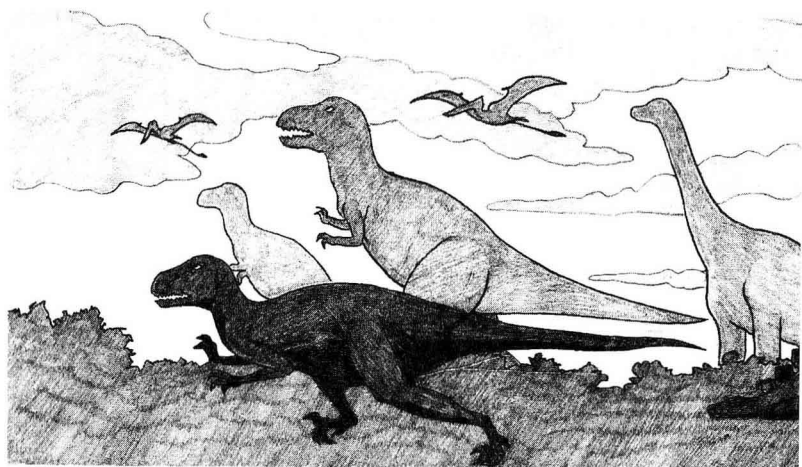
聖地の岩山  
せいちのいわやま

194

19

救出大作戦  
きゅうしゅつだいさくせん

177



解説

香山三郎

326

あとがき

320

痛快三百科

314

31 帰国報告

300

30 飛べ、チャレンジャー号

288

29 地下迷路

274

28 秘密の通路発見

267



## エドワード・ダン・マローン

デイリー・ギャゼット紙の新米  
新聞記者。チャレンジャー教授  
取材したことをきっかけに、  
南米アマゾンへの探検隊にくわ  
わることになる。



## ジョージ・エドワード・ チャレンジャー教授

動物学者。その強烈な個性のた  
めに、学会ではきらわれている。  
以前探検した南米の秘境に、有  
史以前の生物がいまも棲息する  
と主張している。



## サマリー教授

著名な生物学者。チャレンジャー  
教授の主張をたしかめるための  
アマゾン探検隊の調査団長とな  
る。謹厳実直で、科学的探求心  
旺盛な科学者。



## ジョン・ロクストン卿

世界的に有名な探検家で、狩猟  
家としても知られている。探検  
隊に参加。アマゾン探検の経験  
が豊富で、現地の人々からも敬  
われている。





## マッカードル部長

デイリー・ギャゼット紙の社会部長。  
マローンにチャレンジャー教授への  
取材をすすめる。



## マリオ・ムアンバ・ ウンザビ

アフリカ系黒人のブラジル人。  
船会社で働いていたが、やとわ  
れてアマゾン探検隊に同行する。



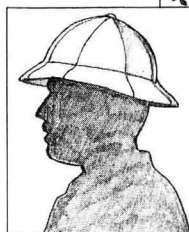
## アタカ

グアハリボ族の戦士。ロクストン卿  
をしたって、探検隊に同行する。



## ゴメスと マヌエル

探検隊にポーターとしてやとわ  
れたメスティーソ（白人とイン  
ディオの混血）。



## メイプル・ホワイト

アメリカ人の画家・詩人。有史以前  
の生物が棲息する、秘境の発見者。

## カロイテリとナボ

クカマ族のインディオ。ポーターとして、探検隊に途中からくわわる。

繪●影山 徹  
装丁●桜庭文一

# 1 とにかく冒険

デイリー・ギャゼット紙のマツカードル社会部長は、赤毛の髪に猫背という、あまり風采のあがらぬ人だが、ぼくが尊敬する大先輩の新聞記者だ。ぼくは彼が大好きだが、たぶん、彼のほうもぼくをきらってはいないと思う。

ぼくは編集室のドアをあけると、まっすぐにマツカードルさんのデスクの前に歩みでた。彼は刷りあがったばかりのあすの朝刊に目を通していたが、ぼくに気がついて、はげあがった額にめがねを押しあげた。

「やあ、マローン君。活躍しているね。炭坑爆発の記事も、先日の火事の記事もいいできだった。きみならいい記者になれるぞ。」

ぼくは内心、しめたと思った。マツカードルさんはつむじまがりで、めったに記者をほめることはなかった。

「おねがいがあります。ぼくを特派員として、どこかへだしてほしいんです。それもできるだけ、ふつうの人がいかないうような危険に満ちた地帯にだしてください。」

マッカードルさんはきよとした目で、ぼくを見た。

「ともかく命がけの冒険をしたいのです。困難であればあるほどいい。ぼくは全力をつくしてすばらしい記事を書きます。」

マッカードル部長は、しばらくぼくをまじまじと見つめた。

「おいおい、今夜のきみはずいぶんと命を捨てたがっているね。」

「そうでもない、ぼくには生きている気がしないんです。」

ぼくはグラデイスの大きくて美しい目を思いだした。今夜は彼女にふられた記念日だ。彼女なしには、この世に生きている意味なんかない。この失恋の悲しみをわすれるためなら、どんな危険な冒険でも挑戦してやる。そして、りっぱな記事を書き、世界一のジャーナリストになって、彼女を見返してやるんだ。

「ははん、なにかあったのだね？」

マッカードルさんはにやにやと笑いながら、ぼくを見つめた。

「まあ、それはきくまい。若いのだから、いろいろ試練を求めるのもいいだろう。だけど、地

図上の空白は、ほとんどうめつくされ、いまは地球のどこにも夢や冒険の余地などなくなつてしまつた。」

マッカードルさんは気の毒そうに頭をふつた。

「やはり、だめですか。」

ぼくはがっかりした。そのようすが、マッカードルさんの同情をさそつたらしい。マッカードルさんは、ふいに顔をほころばせた。

「いや、待てよ。そういえば、一つだけ、きみ向きの危険な仕事がある。」

マッカードルさんは机の引き出しをあけ、なにやらごそごそとさがしはじめた。

「一人、かわつた人物がいる。その人物が南アメリカのジャングルで、信じられないものを見たというんだ。それがなんなのかを取材できるかな？」

「おやすいご用です。でも、なぜ、それがぼく向きの危険な仕事なんです？」

「相手は会うのも危険な人物だからだ。先日、彼は取材にきた新聞記者を家からたたきだした。はたして、きみがぶじに彼のインタビューをとることができるかどうか。第二に、彼が見たものというのが、ちょっと信じられないものだからだ。しかし、もし、ほんとうなら、これは世紀の大冒険になることうけあいだ。」

ぼくは身をのりだした。

「やりましょう。で、いつたい、だれに会えというのですか？」

「ジョージ・エドワード・チャレンジャー教授だ。」

マッカードルさんはやにやしなから、引き出しから一枚の紙切れをとりだした。

ぼくは紙切れに目をはしらせた。

ジョージ・エドワード・チャレンジャー。一八六三年、スコットランドのラーグズに生まれる。四十三歳。

ラーグズ・アカデミー、エディンバラ大学を首席で卒業。一八九二年、大英博物館助手となり、一八九三年、比較人類学部副部長に。その後、筆禍事件をおこして副部長を辞任。功績としては、動物学上の研究に対しクレイトン・メダルを受賞。

所属する学会は、ベルギー協会、アメリカ科学アカデミー、ラ・プラータ学会その他。おもな役職、前古生物学会会長、大英帝国學術協会 H 部会員など。

おもな著書に『カルムツク族の頭蓋骨群の調査報告』『脊椎動物の進化概説』『ワイスマン学説の根本的な誤謬』ほか多数。趣味は散歩、登山。

住所はケンジントン区西エンモアパーク……。

ぼくはその紙切れを小さくたたんで胸のポケットにしまった。

「やってみます。あたってくださいろです。」

「その意気だ。やってみたまえ。」

マッカードル部長は大きくうなずいた。

エンモアパークのチャレンジャー教授の家は深い木立にかこまれて静まりかえっていた。太い幹をむきだしにした落葉樹が家を守っている。

玄関のドアベルを鳴らした。ドアがあき、背の高い執事が姿をあらわした。執事はさぐるような目つきでぼくをいちべつした。

「先生の信奉者である研究生のエドワード・マローンです。ぜひ教授の助手にしてくださいだけないか、とおねがいにあがったのです。」

「お約束はおありですか？」

ぼくはチャレンジャー教授からとどいたばかりの手紙を見せた。執事はちらりと目でたしかめると、ぼくを室内に通した。

「どうぞ。」

ぼくは執事しつじに案内あんないされて廊下ろうかのつきあたりまできた。執事しつじはひかえめにコツコツとノックをした。おくから牛うしのほえるような声こえの返事へんじがあつた。

ドアをあけた。チャレンジャー教授きやうじゆは本ほんや地図ちず、動物図鑑どうぶつずかんなどが山やまのように積つまれた机つくえの向むこう側がわで、大きな背せもたれのあるいすにすわつていた。ぼくは息いきをのんだ。

がつしりとした広い肩幅かたはばと樽たるのような胴体どうたい。その肩かたの上にのつたでかい頭あたま。雄牛おうれうのような赤あからんだつらがまえに、たれさがつた黒いあごひげ。黒いげじげじ眉毛まゆげの下したの青あおみがかつた灰色はいの目め。カールした長い黒髪くろかみが束たばになつて、広い額ひたいにべつたりとはりついている。まっ黒くろな毛けにびつしりとおおわれた長ながくて大きな腕うで。

教授きやうじゆの第一印象だいいちいんしやうは、とてもふつうの人間にんげんとは思おもえないということだった。

「はじめまして、ぼくが研究助手けんきうしゆしゆにしてほしいとおねがひしたマローンです。」

ぼくは戸口とぐちに立たち、おそろおそろ口くちを開ひらいた。

「研究助手けんきうしゆしゆにしてほしいだ？」

教授きやうじゆはぶあいそうな口調くちやうでたずねた。

「けさ、返事へんじをいただきました。ありがとうございます。」

受けとつたばかりの手紙てがみを机つくえの上に置おいた。教授きやうじゆはじろりと手紙てがみに目めをやつた。



「手紙？ ああ。きみが研究者のたまごだとかいうマローン君か。助手はいらんと、きみにこ  
とわりの手紙をだしたはずだぞ。わしのかんたんな論文もわからない若造に、どうして、わし  
の研究の助手がつとまるといふのかね？ さあ、帰った帰った。研究のじゃまをせんでく  
れ。」

チャレンジャー教授は呼びりんをふって、執事をよんだ。

ぼくはもはや研究者のたまごであるというそをついても、はじまらないと思つた。こう  
なつたら、はじめから正々堂々と正体を明かしたほうがいい。ぼくにも新聞記者のプライドが  
ある。

「じつは、ぼくは新聞記者です。こうしてお訪ねしたのは教授がアマゾンで、なにかへんなも  
のをごらんになつたときいたからです。いったいなにを見たというのですか？」

「なんだと！ おまえは、あのげすな新聞記者だといふのか！ 人をだましおつて。」

いきなりチャレンジャー教授は立ちあがり、おこりだした。

チャレンジャー教授はいかついかつこの大きな頭をしているわりには、背が低く、ずんど  
うな体つきをしていた。チャレンジャー教授のどなり声はかみなりのように大きく、その迫力  
に圧倒されて、ぼくは身をすくめた。